

健康文化

## 老人の覚悟

高田 健三

“科学技術の発展と人類の未来”というのが、今、私が教えている文科系私立大学でのゼミのテーマである。この頃はやりの星占いではないが、科学技術の現状から我々の明日を考えてみようというものである。今、私がいる大学には、社会福祉学部があって、社会的ニーズも反映して最も人気のある学部となっていて、それなりに学生数も多い。学生の入学目的は当然ながら増え続ける老人問題や、身体障害者の福祉であるが、最近では人間相互の理解に立った福祉人間学といった巨視的概念が要求されている。ある日のゼミで人口増加と食料の問題を取り上げた。

いまや世界人口は 50 億人を超え、その増加率は（年間約 2%）すさまじく、2000 年には 70 億人にも達する勢いである。人口の急激の増加は今世紀の中頃以降の科学技術、特に生命科学の革新がスタートした時に一致する。つまり出生率の高い発展途上国の乳幼児の死亡率が劇的に減少したことに加え、先進国における老人の寿命が着実に延びたことにあるとみられている。地球上の陸地を最大限に生かし、資源をうまく開発しても、食糧供給や住環境の制約で、人間が生きて行ける人口は 150 億人が限度といわれている。ただし、先進国では出生率が極端に低下しているため、21 世紀中頃に 100 億人前後になったところで落ち着くとみる予測もある。それにしてもこの数字は現在の地球人口の 2 倍である。その時の状況は我々の想像外のものであるのに違いない。日本や西欧先進国では今後現状水準を保ちつつ推移すると考えられるので、爆発的増加はアジアやアフリカなどの発展途上国の人口増加によると見られている。今までにもある程度の策が試みられているが、それにも拘らず、これらの国々では現在でも人口過密のため、食糧不足と劣悪な生活環境から毎月 100 万人以上の子供達が命を失っているという。今年、国連人口基金が発表した世界人口白書は、こんな状況下でもこれらの国における人口増加にブレーキがかかっていないと報告している。一方では世界の食糧生産は頭打ちとなって 1985 年以降は総生産量も、1 人当り生産量も下降し始めているというデータがある。このままだと、人類の運命を左右する局面が近い中に到来すると白書は警告を出している。

あらゆる植物を食い尽くして移動するバッタの巨大集団の発生がアフリカ大陸から伝えられた時、科学者達は手の下しようがなかったし、一時は日本の津浦浦の空地や原っぱを、セイダカアワダチ草が占拠した時も同様であったことは我々も身近に知っている。しかし、それらもいつしかニュースから聞かれなくなったし、目にも映らなくなった。生物界では余り集団が大きくなり過ぎると、過密によって生ずる不都合、つまり、食物（栄養）の不足、伝染病の蔓延、共食いなどが原因となって、一定数に減るまで死んでしまうという自然律があるからである。

最近邦訳が出版されたアン・ナダカブカレンの「地球環境と人間」（三一書房）は、カリフォルニア大学（UCLA）で環境衛生学のテキストに採用されているだけあって、大変興味ある内容が盛り込まれている。私も「環境生態学」の講義の参考テキストとして使用しているが、彼女は人類の危機的状況を豊富なデータを用いて解析している。人口増加を抑えるには、出生率を減らすか死亡率を増やすかの何れかである。今の生命科学の進歩は死亡率を減らしはすれ、増やすことは有り得ない。14世紀の昔、ヨーロッパを襲ったペストはヨーロッパの全人口を約3分の2まで減らしたという。今日ではこのような大量死は考えられない。また、17世紀ヨーロッパで起った30年戦争ではドイツ国民の3分の1が犠牲になったという。米ソ全面核戦争による人類の滅亡の危機——猿の惑星、*The Day After* などの未来予想映画で見るとような光影——は今やなくなったといってよい。一見、世界は平和に向かってきているように思えるが、現状のまま推移すると近い将来、人口過密が原因で、食糧不足による栄養失調、伝染病の蔓延、限られた資源を巡っての戦争による荒廃が起こり、その結果、特に乳幼児の死亡率が上昇して、皮肉にも人口増加が止まる日が来ることが考えられる。人類は他の動物と同じ運命を辿るほど愚かではないと誰もが信じている。しかし、信ずるだけでは結果は出ない。グローバルな視点から、地球人口の危機的増加の抑制のためには、出生率の低下を計ることが緊急事とするのが、世界の識者の一致した見方である。

我が国について見よう、今年の厚生省の白書では、日本人夫婦が一生に生む子供の数が今や1.53人になったと報じた。現状を維持するためには、実際には2.1人が必要であるという。西欧諸国も同じような水準にあるとすると、先進国は地球的な人口増加問題には関係ないように見える。ところが実際には別の面で大いに係わっているのである。先進国民は豚、牛、チキンなど動物性タンパク質を多く食べている。これらタンパク質は、それら家畜がトウモロコシなど穀類の餌を栄養としてつくったものである。栄養エネルギー学からすると、穀物

が持つエネルギーの10%程度しか肉のタンパク質の生産には使われない。つまり、1Kgの肉の生産には10Kgの穀類が必要になるわけである。牛肉の代わりにトウモロコシなど穀類を我々が食べれば、食物の持つエネルギーの無駄が少なくなるわけである。日本人が好む魚にしても最近では養殖が盛んになって、ハマチ、ヒラメ、鯛などは養殖物が幅をきかせている。これらの人工養殖するには何倍もの量のイワシの肉が消費されている。まさに資源エネルギーの浪費であろう。これら動物性食糧を主に食べている先進国の人口は世界総人口の約4分の1に過ぎないにも拘らず、肉の生産のために家畜の飼料として消費される穀物量から換算すると、実に世界の穀物総生産の約2分の1を、先進国の人達で消費していることになるのである。この春、イギリスでハンバーガー1食を節約したお金で、アフリカの人達の飢えや病気を救援しようとキャンペーンがなされた。集められた募金は勿論であるが、その分の挽肉は約10倍もの穀類の節約につながると思えば、結構意味があったというべきであろう。

さてこのような問題提起をしてゼミの学生諸君とディスカッションを始めた。老人社会の始まったわが国では出生率の向上が望まれるにも拘らず逆に低下していることについて、学生諸君は男女とも将来子供は2~3人以上欲しいという。一人っ子の学生は、なぜ親が一人しか生まなかったのか理解出来ないという。白書のデータからすると意外な反応であった。なぜ現状と彼らの願望との間に大きな差が生ずるのか。恐らく今の社会での家族生活を規定しているのは、彼ら自身の意思ではなく、高度に発達した社会環境からの外圧なのであろう。しかし厳しい社会人になる前の学生諸君が、人間としてノーマルな考えを持っていることは喜ばしいこととしなければなるまい。

世界人口の爆発的増加の問題についてはどうであろうか。前述のように食糧供給と人口をバランスさせることは、人類の未来を保障するための緊急課題である。そのためには特に発展途上国の増加率を減少させることが必要とされている。勿論、それらの国の社会資本の充実、国民意識の改革、科学知識の普及が先決である。それに伴って、当然これらの国での老人の人口が増える筈である。やはり産児制限を基本にした人口計画が必要であると議論が進んだところで、一女学生が発言した。「先生、それはおかしい。子どもは未来を拓く可能性を秘めたものであって生まれるものを制限すべきではないと思います。むしろ増え続ける老人の方が重要問題ではないでしょうか」。虚をつかれたというか、私のかねがねの思いが若い学生の口から出るとは予想していなかった。彼女にしても、ではどうすべきかなど、まだ纏まっていないにしても、社会福祉学部の学生が目前の問題として、老人についての認識を自分なりに確かめようとし

ているのである。

前号の拙文で触れたわが母も93歳で昨年末に他界し、今、家内の母が83歳で病床にあって、その都度、先端医療の中での老人の生の非人間性を垣間見て来た。そしてその度に、今や法的に「老人」の仲間に入った自分の近未来の映像を見る思いがした。かなり以前から口に出しかかかってなかなか言えず、とは言っても口に出してしまっ、しまったと思うことがあったが、極く最近出版された三浦朱門の「親は子のために死ぬべし」(光文社)という書き下ろしを読んで、胸のつかえが降りた思いがした。私達と同じ年代で高齢の親を持つ人達が多かれ少かれ心に持つであろう気持ちを、サラッと云ってのけられているのはさすがである。一方、自分を被介護者の立場においた下りでは、さすがに未だ経験しない世界であるだけに、先輩達の例を引きながら願望の世界が展開されている。長生きも85歳ぐらいまでがいいとしてある。私の人生には長過ぎるように思えるが、肉体に精神が伴った人にはそれでよいのかも知れない。いつも疑問に思うのは、老人社会のマスタープランの策定にたずさわる医療も行政も、「定年」前の人間であって、誰も老人の世界を経験していない点である。そこに老人対策が現実と即さない結果を生じさせる原因があることになるのであろう。例えば「尊厳死」は老人の唯一の自由であって、他から認めるとか認めないといったものではないと私は思う。昨年のことだったか、あるテレビ放送で、チェルノブイリ原子力発電所事故の放射能で汚染された村から村民が、政府命令で避難移住させられるドキュメンタリーを見た時に受けた強烈な衝撃は未だ忘れられない。別の村に用意された受け入れのための住宅は、避難民が多いために、総員を収容しきれないことが通達された。村民達の悲しみと憤りの末の結論は、老人達が村に残り、彼らの子どもや孫達を行かせることであつた。若い家族を乗せたバスが村を去るのを見送る時、老人達の顔は悲しみに沈んでいたが、その中に一抹の安堵の表情を見てとったのは私だけだったろうか。自分達が進んで死の土地に留まることによって、子ども達に未来の世界を贈り得た喜びのように見えた。人口爆発から始まったその日のゼミの話題はチェルノブイリ爆発にまつわる老人達の人生の締めくくり方で終つたが、自分自身の人生のピリオドをどう打つか覚悟をきめる時に来ているとの思いが強い。もし、洪水を逃れるはこぶねに乗っていたノアの一家が老人達であつたとしたら、人類は確実に滅亡していた筈である。

(同朋大学教授・名古屋大学名誉教授)